

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

いつか見に行きたい、行かねばならない、と思いついてきた第五福竜丸を見に出かけたのは、今年二月の快晴の日のことだった。
夢の島に足を踏み入れるのも、私ははじめてである。はじめてのことは心はずむものだが、この日は緊張感の方が先に立つ。京葉線の車窓に広がる新木場駅近くの景色の異様さには目をうばわれた。生きて動くものの気配を感じさせぬ乾き切った人工風景。
新木場駅から第五福竜丸の展示館に至る広い道路には車があふれ流れているが、歩道の人影は少ない。整備された公園の緑地の周辺には、冷たくどろろとした風がひそかに吹き荒れているかのようである。「ああ、今日は快晴で良かった、この陽光がなかったら、展示館に向かうのはもっと気の重いことだったろうに」などと考えながら私は歩いて行ったのだ。

展示館の内部に入ると、いきなり第五福竜丸の船尾がそり立っている。予想以上に大きな船体が、合掌作りの
門分野からビキニ事件40年の意義について問題提起を行いました。岩垂氏はビキニ事件を契機に誕生した原水爆禁止運動の意義と、第五福竜丸保存の意味を高く評価し、前田氏は太平洋の被ばく者の今日にふれ、人体実験の疑いある水爆被災の全容の解明と被ばく者との連帯を強化しなければならぬと厳しく問題提起しました。
山田氏は科学者として、核実験全面禁止の重要性や、核拡散防止条約の見直し問題を取りあげ、藤田氏は平和教育の理念と展示館の果たすべき役割の大きさについて実践例をひきながら報告しました。会場からも、多くの方が発言しましたが、第五福竜丸乗組員大石又七さんが八人の仲間が亡くなった乗組員の40年と最近の長期入院と手術の中で考えられたことを切々と述べ「生命ある限り体験を語り続けたい」と結び感銘を与えました。

父は一九五四年、「ビキニ被災後、焼津港に帰った第五福竜丸」と題する
特別展示として、86名の島民のうち31名がなくなり、大半の島民が甲狀腺の手術を受けている厳しい現実が一覧表や表情、氏名とともに57枚の写真で示され、その無言の訴えが胸を打ちます。
豊崎さんは一月下旬ロンゲラップの取材に旅立ちました。写真展は五月二十二日までひらかれます。

語り部 第五福竜丸

上野 道

ような館内を圧して収められていて、私は瞬間に「ここは第五福竜丸のお棺なのだ」と感じた。ここをおとずれる人々に船体が語り続けて来た証言の数々が狭い空間に充満して、私は苦しくなった。苦しむながらも、来て良かったと感じはじめていた。船体とじかに語り合うことで、知っていたにすぎない歴史の一断面が、今の私とつながる生きた現実となつてせまってきたからだ。

私がいづか第五福竜丸を見に行かねば、と思いついて来たのには理由がある。私の父は一九八〇年に他界したが、没年までの約二五年間は広島、長崎の被爆の問題を主題に制作を続けた版画家だった。主題にしたというよりも、むしろ原水爆の問題にとりつかれたと言った方がよい。

作品を制作している。これは焼津港に係留されている第五福竜丸を描いたものだが、不吉な静寂感が画面にみぎっているモノクロームの木版画である。
第五福竜丸の被爆が、その後の父の制作上の主題を決定づけたきっかけではなかったか、そのことを私はたしかめたかったのだ。

「天皇が国民に武器を捨てよと命じた日以来、こんどほど日本人に衝撃を与えたものはない。久保山さんのベッドのまわりには、見えざる看護人」もいる——それは、広島、長崎の原爆でなくなった人びとだ。この九年間、日本人がおさえて来た、原爆攻撃に対するうらみ、悲しみ、嘆きが、いっきよにふきあがるうらみとして

一九七〇年に、父はもう一点、「夢の島の廃船第五福竜丸」を制作している。この時、水没寸前だった船が、多くの人々の努力と熱意のお陰で、今ここに存在する。歴史は語りつがれているのだ、という思いに胸を満たされながら私は館を後にした。

(版画家)

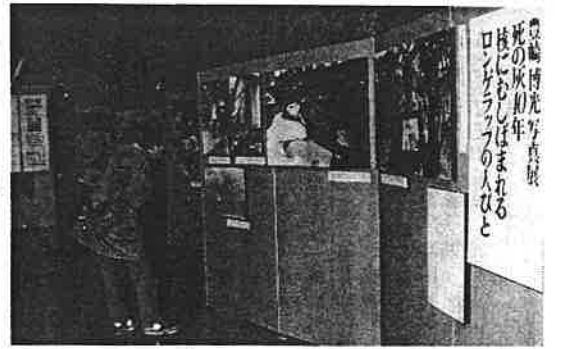


記念シンポジウム「ビキニ事件40周年と平和」

ビキニ事件40周年記念シンポジウムひろく
二月十九日午後、東京神田の学士会館で協会主催による「ビキニ事件40周年記念シンポジウム」がひらかれました。シンポジウムには、科学者、教育者、ジャーナリスト、平和運動家、青年、婦人、事件当時の関係者はじめ、各界から約百名が参加しました。
冒頭の主催者あいさつのなかで川崎昭一郎会長は、ラッセル・アインシュタイン宣言を引用しつつ「ビキニ事件の全人類史的意義から、死の灰40年をどうとらえるかに言及、被害者の立場にたった事件の

全容が未だ解明されないままになっている現実から、第五福竜丸保存運動の精神と経過、展示館の果たすべき今日的意義などについて総合的に報告しました。
記念講演を行なった名古屋大学名誉教授の豊田利幸氏の演題は「いま何をなすべきか」。豊田氏は米ソ戦略兵器削減条約IIが批准されても二〇〇三年に両国の水爆の数それぞれ三千発に減るにすぎないこと、戦域ミサイル防衛構想への日本の協力に見られる現実にあふれつつ、「われわれは無知であることは許されぬ」と強調しました。
「ビキニ事件40周年と平和」を主題としたパネル討論は、服部学協会理事を司会に、ジャーナリストの岩垂弘氏、評論家の前田哲男氏、金沢大学名誉教授の山田英二氏、立正大学教授の藤田秀雄氏の四名のパネラーが、それぞれの専

門分野からビキニ事件40年の意義について問題提起を行いました。岩垂氏はビキニ事件を契機に誕生した原水爆禁止運動の意義と、第五福竜丸保存の意味を高く評価し、前田氏は太平洋の被ばく者の今日にふれ、人体実験の疑いある水爆被災の全容の解明と被ばく者との連帯を強化しなければならぬと厳しく問題提起しました。
山田氏は科学者として、核実験全面禁止の重要性や、核拡散防止条約の見直し問題を取りあげ、藤田氏は平和教育の理念と展示館の果たすべき役割の大きさについて実践例をひきながら報告しました。会場からも、多くの方が発言しましたが、第五福竜丸乗組員大石又七さんが八人の仲間が亡くなった乗組員の40年と最近の長期入院と手術の中で考えられたことを切々と述べ「生命ある限り体験を語り続けたい」と結び感銘を与えました。



展示館で開催中の豊崎博光写真展

館の船尾から船首まで船腹いっぱいならべられ、第五福竜丸の向こう側にいた人びとの40年をあらためて第五福竜丸にひきつけ、船と共に死の灰40年を問いかけています。
特別展示として、86名の島民のうち31名がなくなり、大半の島民が甲狀腺の手術を受けている厳しい現実が一覧表や表情、氏名とともに57枚の写真で示され、その無言の訴えが胸を打ちます。
豊崎さんは一月下旬ロンゲラップの取材に旅立ちました。写真展は五月二十二日までひらかれます。

連載 — 核兵器の廃絶と国際法 ②

平和的生存権

——「北風」でなく「太陽」の英知で——

松井康浩

平和のうちに生きる権利

人生は幸せになるためにこそ存在する。不幸になる人生ならば無い方がよい。幸せとは何か、幸せになるにはどうしたらよいか。古来この命題について多くの人たちが研究し、またそれを求めて実践してきた。

私たちは、金丸信のように一八億円の蓄財をしようとは思わないから刑事被告人になる心配はないし、宮沢喜一のように権力欲もないから小沢一郎のような若者に頭を下げて総理にしてみたら屈辱をしのばなくてもよい。またあれこれの大実業家のように巨額の利潤をえようと思わないから政治家を買収して仕事をもらおう犯行など考えなくてすむ。

これはまことに幸せである。高い所からころげ落ちる多くの「著名人」をみると何とも哀れな人た

ちだと思ふ。

みんなと一緒に、仲よく、みんなのために働く。そこに喜びがあり、楽しみがある。これが幸せというものであろう。みんなのことはどうでもよく、自分だけがよければよいという利己主義のあるところ幸せはない。

その幸せは平和の中のみある。戦争は幸せを奪う元凶である。

最近報道されるサラエボの悲惨な目を覆わしめるものがあるが、広島、長崎、そしてビキニの核爆発の残虐は筆舌につくし難い。これは人間に対して意図的に加えた惨害である。「原爆は被爆者に何をもたらしたか」ではなく、原爆を投下させた「トルーマンは、広島・長崎の市民をいかに大量、残虐に殺したか」なのである。原爆は一人歩きをしない。爆発させた者は史上最大の犯罪者である。かくして日本国憲法は「平和的

生存権」を基本的人権として高らかに宣言した。すべての戦争と武力行使は、大量殺人を目指すかゆえに、これを武力とともに全面的に放棄し、人間ひとしく平和のうちに生きる権利を有することを宣言したのである。平和は幸せの母であり、戦争は幸せを一挙に奪いさるがゆえに「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認」したのである。そして戦争は例外なく「政府の行為」によって起こされ、決して国民によって起こされるものではないがゆえに「政府の行為によって再び戦争が起こることのないやうにする」と「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの平和と安全を保持しよう」と決意した」のである。

核抑止力論の自己矛盾

過日のものものしいブルトニウムの大量輸送によって、日本の核武装が取りざたされた。小沢一郎は北朝鮮が核武装をしているといいたが、その証拠は全く勘たぞうだ。

日本政府は代々アメリカの核政策に全面的に従属しているが、そのアメリカは北朝鮮が核査察に応じないならアメリカの核を南朝鮮に配備すると威迫した。何とも物騒なことである。ここに貫かれていたアメリカ政府の思想は、核脅迫による意思の貫徹であって、甚だ手前勝手な近所迷惑、危険千万なことである。

核爆発の影響は二国間に止まらないし、自国は核兵器をもつが、相手国はもつなという核不拡散条約ほど不平等な条約はない。また核兵器をもって相手国を制圧しようという核抑止力論は、常に相手国の核兵器を上まわる核兵器をもっていなければならないから限りなき核軍拡競争を引きおこし、遂に地球上に五万発、何十回となく全人類を全滅させるに足る大量の核兵器を存在させるに至ったのである。

この悪循環から脱却し、「北風」ではなく「太陽」の英知をもって、核兵器の即時全面廃止に向けて努力しなければならぬ。
(関東反核法律家協会会長、協理事)

劇団「海」"たべてうまいよ三崎のまぐろ"上演へ

神田時枝

四十年前の一九五四年三月一日、アメリカはマーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験を行いました。その実験により、操業していた日本の漁船が八五六隻も被害を受けたといいのです。私共の常識では、ビキニ被爆の被害船は、第五福竜丸だと聞かされ、読み、映画化され、久保山愛吉さんの痛ましい死に、アメリカへのいきどおりを大きくし、泣いたのです。

私は、夫(一九九三年十一月十日に亡くなりました)の公害病の転地療養のため、一九七六年に東京から神奈川県三浦市に、ささやかな家を建てて移り、一年の大半を三浦で暮らすことになりました。私は夫の看病、本来の俳優の仕事、夏は銀行から借りた借金の返済のため民宿兼海の家で、と目が廻るほど働きました。

そんな中、いつしか三浦半島の若者たちが、私共夫婦のまわりに集まってくるようになって、さらに劇団を創ろうと、わいわいしているうちに、三浦半島劇団「海」が結成されました。さあ、そうなる、劇団である

以上なにか芝居をやって、公演しなければならぬ、だけど、皆ほとんど芝居を見たこともない、もちろん舞台上上がったことなど一度もないという人たちが。でもなんとかこの劇団を地域に根付かせたいと私共夫婦は夜を徹して劇団のあり方などを話し合いました。この地域の身近な問題を取り上げて、三浦半島の方々が、「本当だ、人ごとではない」と親しんで見に来ていただける特色を持つことだと考えました。

戯曲など書いたことのない私は、夫が調べてくれた資料をたよりに、第一回公演「百八十分の一の確率」第二回公演「地図から消えた三浦半島——岬の見える停留所」と、反戦平和を訴える戯曲を書いて公演しました。そして好評を得ることができました。

さて、第三回の公演は……。頭が痛くなります。そんなとき、入退院を繰り返していた夫の同室に、あのビキニ環礁で当時操業していた、何という船かは絶対言わないが若い時船員だったという方がいたのです。無

口な方で、その当時のことになると何故か機嫌が悪くなり話を他にそらしてしまわれるのです。

私は、これだ!と思いました。劇団の方に仕事のお休みの日をお願いし、市の資料館、三崎のまぐろ屋さん、地区労の役員さんへと資料集めにとび廻りました。調べれば調べるほど当時の三崎のまぐろ船が、あのビキニでどんな悲惨な思いをさせられたかがわかってきました。国の思惑で公表することも禁じられ、国からビキニ一文の補償ももらえず、体調をくずし、それぞれ無一文で故郷にひきあげていった船員、その先は、さあどうなったか、生きているのか死んでしまったのか……。三崎の被災船が百五十三隻あるとも知りました。

私は、国の無情さと、公の海で広島・長崎の原爆の千倍もの威力を持つといわれる水爆の実験を何回となく行ったアメリカへの怒りに体の震える思いでした。書かなくては、知らせなくては、私は劇団の第三回公演を「第十三光栄丸ビキニで被爆す——たべてうまいよ三崎のまぐろ」とし、調べたありのままを舞台にのせました。その反響は意外に多く日本中のところどころから励ましと共感の便りをいただきました。

「たべてうまいよ三崎のまぐろ」が放射能があって食べられないからと、三日四夜も走り続けて、命と引き換えに得たまぐろを一万三千五百貫も千葉の野島沖に捨棄した海の男の悲痛な泣き声が、今も私の耳に聞こえてきます。「アメリカのばか野郎、息子をかせせ、まぐろは俺の命だ」……と。

その後退院した夫は、冬の寒い日に同室の人にチラシと聞いた第十三光栄丸の漁労長をしていらした岡野要次郎さんを訪ね、用意していたテープに当時のお話を録音しました。はじめは口数が少なかった岡野さんでしたが、夫と同じ和歌山県出身とわかったすっかり胸を開いて、二人ともお国言葉まるだして語り合いました。その岡野さんも口頭ガンで三年前亡くなりました。人類を滅ぼす核兵器は、この世から全廃せよと、夫も岡野さんも見えないところから呼んでおきましょう。

(俳優・三浦半島劇団「海」代表) ●三浦半島劇団「海」第七回公演「第十三光栄丸ビキニで被爆す——たべてうまいよ三崎のまぐろ」二幕五場、作・演出 神田時枝
・3月26日(日)午後六時 開演
・3月27日(月)午後一時半 開演
・三浦市青少年会館ホール (0468・882・2765)

「がん」と告げられて

大石又七

「大石さん、小さいのが一つあるよ」

うつむき加減に近づきながら、やけにさらっといわれた言葉。これが大病院の女医、I先生の私へのがん告知だった。

一昨年前、気にかけていた慢性肝炎が悪化しはじめ、精密検査して分かったのがC型肝炎ウイルス肝炎(被曝当時うけた輸血が感染の原因だという)。運よく開発されていた新薬、インターフェロンを使うことができ、それも治る確率が三〇〜四〇パーセントといわれる中に入れて、ウイルスを消すことができた。消えているといわれたときは本当に嬉しかった。助かった、と心の中で笑いが止らなかった。

一年間の治療のしめくり撮ったCTとエコーの中に、肝臓がんは見つかったのだ。

私は、先生の言葉を耳では受け

止めたが、自分のこととして頭の中へ素直に入れることは出来なかった。「がんなんかにかかるわけがない、何かの間違いだ!」。

祈る思いもむなしく、それは現実のものだった。どれくらい戸惑ったか、家族も思いは同じで、啞然とした。「いよいよ俺の番がきたのか」。あれこれと混乱する中で、私は九人目となる自分を意識した。そして同じように肝臓がんで亡くなった仲間たちのことを思い浮かべながら、その家族があじわった苦悩も実感した。

直径二センチ五ミリほどの小さいがんは、切腹を思わせるような大きな傷を残して取り出された。入院は百三日という長い日数を要したが、またしても私は命拾いをする事ができた。私は誰かに見守られているのかもしれない。歳半ばにして、思いを残しながら亡くなっていった仲間たちが、

ビキニ事件や死の灰の恐ろしさを「何時までもお前、伝えろ」といつて時間を与えてくれたのか。それとも、がんと闘いながら、私の本『死の灰を背負って』を出版にまでこぎつけ、亡くなられたNHKの工藤敏樹さんだろうか?

広島・長崎に次ぐ、第三の被曝といわれる第五福竜丸ビキニ事件。あれから四〇年。核兵器は山のようになり、核のかさの中の平和など、とんでもないことを平気で言う時代になってしまった。そんな中で、私はビキニ被曝者の一人としてこれまで何をしてきただろう。口先だけの平和、核兵器反対ではなかったか。原水爆被害者団体協議会など、このビキニ事件がきっかけで組織されたりしているのに、ビキニの被曝者たちはなぜか後ろ向きだった。それでも、振り返って自分なりに良かったなと思うこともある。「死の灰を背負って」の本が、年内には点訳、製本されて全国の目の見えない方々に読まれるということだ。またイギリスBBC放送からも取材の依頼があり、日本にいる佐久間さんという女性が、今、やはり英訳して本社に送っているなど、本をめぐって

ての話題があちこちからある。「教材がわりに読んで聞かせています」と、遠く見知らぬ学校の先生から手紙をもらったりすると、本当に嬉しい。あんなものでも少しは役に立っている、と思うと同時に、この事件の重みをあらためて痛感する。

私に残された時間が、今、どれだけあるか分からないが、増え続ける世界の被曝者たちとも手をたずさえて、核兵器の全廃、原子力発電などから起こる放射能の怖さ、その廃棄物問題など、あらゆる角度から訴え続けていかなければ、と、そんなことを考えながら私は病院を出た。

入院中に、とても残念なことがあった。昭和五十年四月、四十七歳で亡くなった川島正義さんの息子(義明さん)が急死したという知らせだ。義明さんは、私の本を読んだといって以前に電話をくれたことがある。「私も東京の八王子にいます。一度、そちらに何って船に乗っていた時の親父のことや、東京へ鈴木隆さんと三人で出てきた頃の話など、ゆっくり聞かせてもらいたい」。これが彼

との約束だった。だが、とうとうそれもかなわなくなってしまう。父親を亡くした彼ら兄妹四人が辿った道は、言語に絶するものがあったようだ。

第五福竜丸の乗組員は、二十三人のうち五人が初めての航海。あとの者たちも一年そこそこの短い付き合いだった。ビキニ被曝者という重いレッテルを背負わされて、東大付属病院と国立東京第一病院(現、国立医療センター)に分かれて入院。一年二カ月の闘病生活を経て、今は年に一度、千葉の放射線医学総合研究所で検診を受けている。乗組員たちは、ふだんはほとんど顔を合わすこともなく、事件のことや平和についての話などもしたことはない。心の中で思っ

かったら、死の灰をかぶらなかつたら、八人もの仲間の命を失うことはなかつたらうに。俺たちの体はそんなヤワなものではなかつた

「死の灰40年」——展示館のポスターできる

第五福竜丸展示館の新しいポスターが完成しました。ビキニ事件40周年にあたり、展示館をもっと多くの人びとに知らせようと作られたもので、コピーも「死の灰40年」。写真は前回と同じ写真家の英伸三氏。84cm×55cmのA判全紙変形・縦長の大きなポスターで二枚一組。一枚は雄大に屹立する圧倒される

はずだ。「水爆が憎い。被曝者の苦しみ」が分からない者が憎い。被曝者の悩みや怒りは、外に向

ような船首、もう一枚は流れるような曲線を見せる船尾とがっしりした舵。コントラストの鋭いモノクロの写真で鮮烈な印象を見る人びとに与えます。原水爆のない未来へ——第五福竜丸展示館の文字と所在地等の案内もすっきりと入りました。来館する年間七百校近い小中学校に校内で改めて展示されるよう

かったり、また内にこもったりして、何時までも続く。(ビキニ水爆実験被曝者 おおし・またしち)

願って渡されますが、いくつかの地方の学校にも来館の要請を付して贈られます。ご希望の方は代金五百円(送料二七〇円・切手可)を添えてお申し込み下さい。また、ポスターとあわせて、来館者に訴えるカンパのお礼用に、展示館のはがきも作成されました(撮影・英伸三氏)。船首、船内、船尾の三枚、第五福竜丸保存のためにと書いた大きなカンパ箱の横に置かれています。



あの時、ビキニで被曝さえしな